

筑波大学特別支援教育研究 第7巻の刊行にあたって

筑波大学特別支援教育研究センター長
四日市 章

我が国で特別支援教育制度が始められ6年が過ぎました。この間、特別支援学校の施設統合、通常の学級への働きかけ、特別支援学校での各障害に応じた専門性の維持と発展など、さまざまな課題が提示され、多くの先生方が、それに真摯に取り組んできました。筑波大学特別支援教育研究センターでも、その使命にそって、特別支援教育の推進のために附属特別支援教育諸学校や附属学校教育局との連携の中で研究・研修活動を展開して参りました。このたび刊行致します、本巻の構成を見ますと、当センターや附属特別支援学校が辿ってきた道筋も見えるようです。特別支援学校での専門性の深化、通常の学級に向けての特別支援教育の展開の試み、途上国への教育支援など、さまざまな教育研究活動が展開されてきました。

特別支援教育制度がスタートした当初から、今後解決していかなければならない多くの課題が提示されてきました。そして、制度の展開と共に、社会の変化に伴う新たな課題や、予想していなかった成果などもみられてきたように思います。我が国の特別支援教育制度の特徴である、特別支援学校での専門性の維持発展と発信については、子どもの数の減少やそれに伴う特別支援学校規模の縮小など、ますます厳しい状況になってきているようにも感じられます。私の関係している、聴覚障害教育の分野は、少数障害を対象としていることもあり、いっそう厳しい状況ともなっています。聴覚障害教育に関するさまざまな教育理念の違いを見いだすだけでなく、共通性を見いだして、関係の教育・研究組織が、連携・協力を強めていくことが必要とされています。

違いと共通点とを的確に認識していくことは、さまざまな障害に対応していくためには、大変重要なことだと思います。異なる障害種での専門的な指導知見を相互に共有することによって、あらたな教育的視点や指導の観点が見いだされていくようです。このことは、今年度の筑波大学附属特別支援学校の連携研究での議論を通して、そこに参加した教員とも共感致しました。特定の障害種の指導においては当たり前のことで、特に意識していなかったことが、他の障害種の子どもの指導では、新しい指導の観点となり得るということです。また、教育や指導において相互に協力するときには、まず、そこにある教育の場の実態を重視すること、よく知ることが重要であることも指摘されました。このことは、途上国への国際教育支援において、すでに古くから、多くの人々によって指摘されてきたことでもあります。そこで行われている教育や、人的、物的な環境をよく理解したうえで、何をどのように支援すれば、的確な教育が展開できるのかが明らかになってくるということでしょう。このことは、特別支援教育を通常の学級の中に展開していくときにも、十分に意識しなければならない課題であることも、附属学校の多くの教員によって指摘されました。

異なる立場、異なる背景をもった人が、相互に意見や情報を交換して、よりよい教育環境を作り上げるには、まず、相手の話をよく聞き、確認し、少しでも理解を深めようとするのが重要であることを改めて感じさせられる今日この頃です。